

新・農業経営者ルポ／第176回

# 牛島謹爾シリーズ① アメリカ帰りの開拓者精神を 後代まで継承



戦前のアメリカはカリフォルニア州で大成功を収めた日本人農業経営者という、ワイナリーの長澤鼎やコメの国府田敬三郎が思い浮かぶだろう。ここにもう一人知ってほしい人物がいる。その二人と同じ時代を生き、「ポテト・キング」や「馬鈴薯王」と称された牛島謹爾である。手間のかかるポテトの生産を3万エーカーで行ない、全米の市場を左右したといわれた。彼の農場では監督者のような立場で働く同郷出身者がいたが、そのうち井上藤藏という男の子孫だけがいまも福岡県各所で農業に携わっている。3回シリーズで取り上げる第一弾は久留米市の(有)久保田園芸に焦点を当てたい。

文・写真／永井佳史、写真提供／久留米市教育委員会、(株)梓書院

## 戦前のアメリカで30000人を束ね、3万エーカーでポテトを作った牛島謹爾

100年ほど前の大正14(1925)年、筑後国久留米藩三藩郡(現・福岡県久留米市)生まれの牛島謹爾がアメリカはカリフォルニア州サンホアキン郡の三角州地帯を兄や同郷の者らと開拓し、3万エーカー(1万2240ha)を超える規模でポテトを生産していた。参考までに現在の日本国内で最も作付面積の多い北海道の帯広市でさえ3500ha程度に過ぎないことからすると、その壮大さに圧倒されるだろう。影響力は当然大きく、同州産の全産額の8割5分を彼のシマ・ファームが占め、全米の市場を左右したといわれる。アメリカではジョージ・シマと名乗り、「ポテト・キング」や「馬鈴薯王」の異名を取った。在米日

本人会の初代会長も務め、大正15(1926)年に逝去するまでの18年間、数百万ドルに及ぶ私財を投げ出して日米親善や排日運動の緩和に尽力した。

現代のように機械化も十分に進んでいなかった時代であり、しかも場所も外国である。一説によると農場には国籍も多様な3000人の人間が集っていた。それに対し、農場を運営しながら労働者を管理していたのが謹爾と同郷出身の日本人だった。その一人に井上藤藏という人物がいた。

## ポテト・キングの農場で働いた井上藤藏と、その子孫たちによる福岡での農業経営

謹爾や彼の農場で仕事に携わった日本人の子孫で、その後も農業に従事したのはこの井上藤藏の子孫のみだという。今回取り上げるのは井上

の次女・芳子と結婚した久保田民藏の3兄弟の長男・寿の(有)久保田園芸(福岡県久留米市)に関してになる。ちなみに、昨年他界した次男・稔の(有)久保田農園(福岡県糸島市)は次回に譲るが、両社は業務上のかかわりがあるため、若干触れることにす

る。寿や稔の祖父に当たる井上藤藏は、22歳のときにシマ・ファームで働くべく渡米した。後年婚姻した井上には妻との間に二男五女がおり、その次女が寿や稔の母の芳子になる。芳子はアメリカの謹爾の私邸で



晩年の牛島謹爾(1864-1926) ▶ 久留米市教育委員会所蔵



▲2017年にはマンガ化もされた。(株)梓書院発行

牛島謹爾シリーズ① アメリカ帰りの開拓者精神を後代まで継承

生まれ、帰国後に久留米高等女学校（現・福岡県立明善高等学校）を卒業している。

そんななか、父・井上藤藏の一言で農家の久保田民藏に嫁ぐことになる。長男・寿を身ごもった際には民藏が出産を待たずして第二次世界大戦に出兵したものの、無事帰還する。それから民藏は農業一筋で生計を立てていくことに決めた。

民藏は福岡県内の農家の出であり、義父の井上藤藏のようにアメリカで農業を経験したわけではない。そして、妻の芳子は高学歴と来ている。胸中は複雑だったかもしれない。実際、民藏からすると義理の娘である寿の妻にこっそりとこんなことを話していたそうだ。

「（妻の芳子を指し、）これだけの嫁じゃ、わしも苦労したばい」

ただ、これは否定的な発言ではなく、前向きに捉えての言葉だったのではないかと思われる。育った環境の違いを受け入れ、義父の井上藤藏や妻の芳子が謹爾、あるいはアメリカから体得した思想を吸収したい。それを裏付けるかのような回想を寿が始めた。

「親父（民藏）もお袋（芳子）と一緒にになってから考え出したんじゃないですかね。祖父母（井上藤藏夫妻）が尊敬してやまず、お袋も口に

する牛島謹爾とはどんな人だったのか。そこに少しでも近づいて喜ばれたかったんでしょね。そのかいがあつてか、お袋からは終生、農家が嫌だったとは聞きませんでした」

民藏はアメリカの消費動向を意識していた。食生活の変化で日本でも野菜が浸透してくると見ると、米麦主体の作付けからゴボウやニンジンの一部取り入れる。消費者ニーズを探る一方で、経営的な視点も忘れず、農業で家族を養っていくには毎日収入があつたほうが安定すると踏んだ。その点からも野菜は適当だった。ここで民藏と行動を共にするのが寿になる。

**謹爾や藤藏の思想をベースに、親子でニッチな作物の生産に乗り出す**

民藏から一緒に営農することを命じられた寿は中卒で家業に入る。そこには勉強すると農業から離れることになるという民藏の読みがあつた。

寿の就農当初にキーポイントとなる二つの出会いに恵まれたのだが、その一つは福岡県の農業改良普及員だった。間近に迫った減反政策を機にこれから流行するのはトンネル栽培や施設園芸だとしてその指導を受けた。

「それ以前に資材はどこにでも出

回っているわけではありませんでした。だから、地元の久留米にはなかった。で、福岡まで電車で135cm幅で長さ50mのビニールフィルムを買に行きましたよ。親戚でタケノコを採っている人がいましたので、支

柱はそれで代用することにしました。昔の普及員は互いに学ぶ姿勢があつたことも付け加えておきます。それに支えられました」

減反政策が始まると、一筆だけこめづくりを断念してそこにガラスハ



植民遠征隊元勲仲茂助帰朝送別会於牛島總督私邸（明治36年）久留米市教育委員会所蔵  
前列左から2番目が牛島謹爾、後列左から2番目が井上藤藏になる。

ウスも建てた。たびたび水害の起こる地域のため、設置場所は高台の農業用水を使わないでも半永久的に構えていられるような土地を選んだ。以来、半世紀近く経ったいまでも少々のレベルでは被害にさらされていないという。

作付品目の選定に関しては、一般的に自分で値段が付けられない市場流通に不満があり、そこで知り合った八百屋との交流が役立つ。1軒といわず、仲卸を含めそれこそすべての業者とコミュニケーションを取ることが勉強になった。なかでも料亭や寿司屋を取引先に持つ八百屋の店主から得た情報は、これまでつかんでいたものとはまったく異なっていた。その店主は今後清浄野菜が重宝がられるとしきりに訴えてきた。当時は肥料といえば下肥で、流通からすると衛生面で化学肥料に切り替えてほしいという願いがあったのだろう。その要望にはほどなく応え、肝心の作付品目はサラダ菜を採用した。

「和食の食材もいいですけど、いまから伸びるのはサラダ菜ですよということでした。その提案に乗って八百屋と契約し、毎日のように収穫して自転車で配達しましたね。なんで契約栽培なのかといいますと、私は高校に進学しませんでしたので、

高卒で就職した友人の給料を日割りで計算してそれに負けない単価を設定する目的でそうしました」

およそ1週間で収穫できるカイワレダイコンの生産も手がけるようになった。作業は寿と民藏とが栽培ベッドを挟んで向かい合って行ない、二人で話しながら手を動かすのが常だった。

民藏は早くに父親を亡くしている。かわいがって世話していた馬に蹴られての事故だった。往時の寂しさや苦勞を直接示さないまでも、親子の絆の大切さは会話を通して寿に染み入っていた。民藏は父親の死亡理由にしても、盲目的に馬が悪いと判断せず、本人が注意していなかったからこうした結果に至ってしまったんだと語っていたという。謹爾や井上藤藏の話題もそこに加わり、自然と先人を敬う精神が醸成されていった。

謹爾について補足すると、3万エーカーだの3000人だのと並べ立てたが、最初から成功し続けたわけではない。そもそも当地には謹爾が参入する前の30年もの間、白人が開拓を試みるも誰一人として手の中に収められなかったのだった。そこで謹爾は兄などを頼ることにした。牛島家は2000年来農業を営む旧家だった。開墾や耕作のために長兄の

(有)久保田園芸 (福岡県久留米市)  
取締役

**久保田 寿**

くばた・ひさし 1941年生まれ。57年、就農。

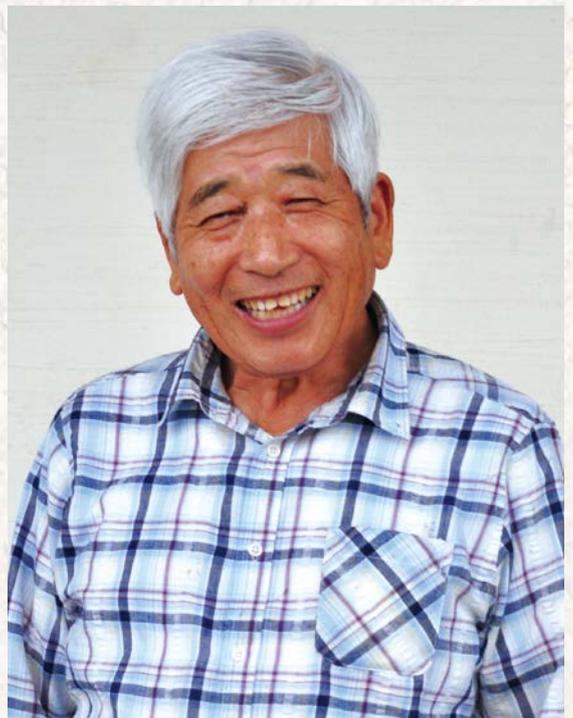
代表取締役社長

**久保田 淳**

くばた・すなお 1965年生まれ。三重県の日生学園高校を卒業後、奈良県のイチゴ農家や福岡県のブラジル研修を経て、就農。93年、(有)久保田園芸を設立。2000年からハーブ類の生産を始める。11年より現職。

**久保田 裕作**

くばた・ゆうさく 1992年生まれ。琉球大学農学部を卒業後、久留米市卸売市場内の(有)ロジスティクス久留米に入社。2018年、就農。



久保田 寿



スペアミントは、大きくなったら刈り込み、新芽で収穫する。



青汁ではなく、サラダ用のケール。ものすごく人気があるという。



焼肉を巻いて食べるのに使うサンチュ。

寛平を呼び寄せたほか、やがて遠縁の井上藤藏がメンバーに名を連ねた。謹爾は天災や体調不良が重なって破産を味わうもそれを乗り越え、一経営者の立場だけではなく、在米日本人会の会長として長きにわたって国家の間に立つ役目を果たしたのである。

そうしたことも民藏は耳にしていたのだろう。これを咀嚼したうえで寿や稔らに、そこからまた次の世代以降へと伝承されていった。

なお、ガラスハウスの建設にあたっては、カルシウム肥料の「カル

**謹爾を端緒にした精神の系譜が三代目以降にも紡がれる**

ゲン」の存在が大きかったのだという。単一作物や輪作周期が短い栽培では土壌の入れ替えや土壌消毒が必要になる。そこで聞きつけたのがこの資材だった。地元・久留米市内に本社のある(株)坂田種苗からカルゲンを使えば土壌はそのままでも大丈夫との情報で確信し、今日に至るまで連作障害は発生していないという。

80年代半ばには高校を卒業した寿の長男で、(有)久保田園芸現社長の淳

が奈良県のイチゴ農家やブラジルでの研修を経て、就農している。そのイチゴ農家でのことにまつわるエピソードを寿が教えてくれた。「親父（民藏）が私に先祖のことを話してくれたように、私も息子（淳）に同じように接しました。すると、研修先の主人から『淳くんがおじいちゃん（民藏）のことをよくしゃべっていましたよ』と聞いたんです。そのとき、自分は親に恵まれたと思いましたね」

作付品目は状況に応じて変化させてきた。現在ではハーブ類のメジャー

品が基幹になり、サラダ用ケールやサンチュ、昨年からモロヘイヤの生産に取り組んでいる。ハーブ類は、20年くらい前にオオバがプラスチック製に代用されていくなかで導入したものだ。これには寿の弟の稔（故人）が大いに関与している。

「稔は親父（民藏）から糸島の土地を購入してもらって営農していたんですけど、外に出なくちゃいかんというタイプでした。そんな稔に息子（淳）が『おじいさん、おじいさん』と慕ってよく交流していましたし、稔の長男で(有)久保田園芸現社長の真透くん

ともそうでしたね。こうした親戚関係があるのも我が家系の特徴かもしれません」

稔は、謹爾や藤藏が活躍したカリフォルニアを旅したことがある。そのときに見つけたのがハーブのコリアンダーだった。詳細は次号に持ち越すが、販売が軌道に乗ると供給が不足することがしばしばあった。ここで日ごろから連絡を取り合っていた稔と淳とで補完的生産が持ち上がる。同時に淳は新規営業開拓を申し出た。稔のテリトリーである福岡市内には手をつけないと切り出すと、鹿児島と宮崎の取引先はお前にやろうと逆提案された。淳は稔の下で研修したこともあった。

「農業の知識はもちろんですけど、ただ物を作るだけではなく、自分の野菜を使ってくれるお客様第一の考えをよく聞きましたね。牛島さんには思い入れが非常に強く、何事にも挑戦すること、実践して得られることがあると語っていました。それは常に念頭に置くようにしています」

(淳)  
淳も50代に差ししかかっており、後進の育成に動き出している。長男の裕作は大学卒業後、卸売市場内の会社に3年間勤務し、昨年4月に入社した。家業につながる実務のみならず、新たな人脈づくりをしてきたこ

ともプラスになりそうだ。今後の抱負を次のように語る。

「偉大な祖先の流れを汲む者として身が引き締まります。就農したばかりでまだまだわからないことがたくさんありますけど、父や祖父の下でしっかりとした知識を身につけていきたいです。そのうえで既存や新規のお客様のニーズに応えられるような野菜づくりを目指していきたいですね」

寿の次男も国際総合物流企業を経営し、経理を担当している。謹爾を端

緒にした精神の系譜がこうして紡がれている。

「牛島さんのところで働いて帰国してきた人の住まいはどことも立派です。単にお金をいっぱい持って帰ってきたからということではなく、日本もいずれアメリカのようになるんだという生活様式や環境衛生が表れています。そういうことを含め息子たちにコンタクトしてきましたけど、自慢ではないですが、よく理解した人間に育ってくれました。親の言うことに従うのとも違い、いろん

な意見を出し合いながら経営できています。これはやっぱり牛島さんと祖父の藤藏の血筋が色濃く受け継がれてきたからなんでしょうね」(寿)  
親の背を見て子は育つということわざがあるが、それが具現化されてきたのがこの家系だろう。謹爾や井上藤藏が周囲との結びつきを大事にしながら新世界を切り拓いていったように、一度限りに終わらない未永く強固な関係性の構築もこの家系にはあるように感じてならなかった。

(文中敬称略)



事務所の周りを囲むようにハウスや畑がある。